

つばさこよみ

## 〇〇一

かつたのだ。  
繩すがつた。

揉みしだいた。

頬ほおづりした。

舐なめて——吸つた。

五感を全て、集中した。

必死に。

救いを求めて。

ちよつと埃臭い、密室。

それは——マットの上だつた。

「あ、阿良々木くん？」 そんなにしたら、揉んだら

痛いよつ……あ……あんつ

「ごめんつ、でもつ……羽川つ！」

「あは。おっぱい本当に好きなんだから」

「ごめんつ」

「もう、謝つてばかり……んつ」

「はあつ、はあつ」

羽川の中はとても熱かつた。エピソードに彼女が

「——あつ、阿良々木くん……ん——あつ……」  
 「はあつ——は、羽川つ！……くつ——」  
 「……つ……あつ——はあつ……」  
 「んつ——くつ、んつ、んつ、ぐつ……」  
 「つつ、あんつ、はあつ……阿良々木くんつ」  
 「くつ——ふつ、ふつ、んつ……羽川つ！」  
 生まれて初めてだつた。  
 死ぬかもしれない、直前に。  
 死のうと思つた、直後に。  
 だから。

僕は必死で、彼女の大きくて柔らかな暖かく、とてもいい匂いのする優しい胸に依存した。もちろんこれは僕の勝手な言い分だけれど、そうするしかな

殺されかけたとき、触れた内臓——体内と同じ温度。

まさか、また、この熱さを感じるとは思つてもいなかつた。今はとても敏感な部分で触れている。とても敏感な部分と触れている。

密着して——

一つになつてている。

やわらかな——

熱く、血のかよつた——内臓。

濡れた、ぬるぬるの——粘膜。

現実逃避だつたのかもしれない。これから味わう

恐怖から逃げたかつたのかもしれない。生きているものの、本能。

だから。

それでも。

今までも。

今でも。

彼女は僕を救つてくれた。

救つてくれている。

精神的に。

そして、肉体的にも。

いや、やはり精神的だつたのかもしれない。

僕は必死で彼女を求めた。

本能に基いて。

少しづつ高まつていた感覚が急激に変化する。

「くうつ！ 羽川つ！」

「んつ！」

そして僕は自分では制御できない、ものすごい快感の後に——一瞬意識を失なつた。

——快感の余韻がじわじわと続く。

暖かくて柔らかな羽川。

下半身の痺れるような快感。

急激に快感が薄れるのと反比例して意識がはつきりしてきて——思考が回復する。それでもまだ、羽川は柔らかく優しく——敏感な部分を包んでくれていた。

僕達の湿度と温度のせいで、彼女の眼鏡が真つ白

に曇つてしまつてゐる。綺麗な瞳が見えない。呼吸は苦しいくらいに荒かつた。お互ひの名前すら呼ぶことができないくらいに。

「はあつ——はあつ、はあ……」

「はあつ、はあつ、はあつ」

…………。

…………。

呼吸を整える。

何度も、ごくり、と唾を呑み込む。

「はあつ、はあつ、はあ」

「はあつ、はあつ」

立ち上がりえない。

…………。

…………。

僕は呼吸を整えつゝ羽川を見つめていた。少しずつ眼鏡の曇りが薄くなる。レンズの透明度が上がり

視線があらわになると、彼女は恥ずかしそうに一瞬目線を外す——けれど、すぐに僕の目をしつかりと

見て微笑んでくれて……二人で幸せな感覚をここでも共有する。

やつと苦しかつた呼吸と心臓の鼓動が落ち着いてきた。

そんな中、羽川は明るい調子で、

「あつは、あまり——痛くなかったよ」

そんなことをあつけらかんと言つた。

「あ、ごめん……そつか。そうだよな。女の子は最初痛いつていうもんな——僕、必死で……全然、優しくできなかつた……」

「ちょっと乱暴だつたぞ」

「ごめん」

「もー、私壊れちゃうかと思つたよ？」

「ごめん」

「それに……中でしちやうし——赤ちゃんできちゃ

つたらどうするの？」

はにかんで。

本当に嬉しそうに。

上目使いで僕を見る。

「——ど、どうしよう」

「えつへつへ」

羽川は緩みきつた笑顔で僕にぎゅっと抱き付いてきた。大きくて柔らかな胸が、僕にぴったりと密着する。

とても気持ちいい。

彼女の鼓動が響く。

「——ご、ごめん」

「さつきから謝つてばかりじゃない」

羽川は僕の前髪をいじりながら言う。

「だつて……」

「だから——だから、私……阿良々木くんを許さないことにした」

羽川の顔が、眞面目になる。委員長の顔だ。

「——だから……必ず帰つてきて。帰つてきたら、許してあげる」

でもそんな顔も長くは持たず——口はへの字にな

り、頬には涙が流れていた。初めて見たかもしれない、羽川の泣き顔。

「わかつた。僕、絶対に戻つてくるよ」

僕は彼女の頭を撫でながら誓つた。

「うん、そしたら……またエッチ——じゃない。ちやんと言わなきやね。えつと——セックスしよう？」  
また愛しあおう？だから、だから絶対だからね  
そんな委員長に似合わぬ、らしからぬ台詞で僕を励ましてくれた。

僕はそんな羽川を強く抱いて、キスをして——

約束をした。

戻つてきたら二人でいっぱい勉強しよう。

戻つてきたら二人でいっぱい遊ぼう。

戻つてきたら二人でいっぱいデートしよう。

僕は春休みに童貞を喪失した。

人間という立場も喪失した。

羽川は、そんな僕を助けてくれた。

卑劣にも僕は彼女の身体を要求した。

最初は冗談だったのに。

僕も彼女も冗談だったのに。

卑怯になるくらい不安だったのだ。

暖かさが欲しかったのだ。

羽川翼は、そんな僕に抱かれてくれた。

人間ではない僕に。

吸血鬼の僕に。

——体育倉庫で。

キスショットと、殺し合う前に。

論、僕の彼女であるところの羽川ではない。女の子は僕を部屋に上げたままシャワーを浴び！ 全裸で脱衣所から僕の前に出てきて!! その美しい身体を見せ付けた。お礼と称して。大サービスと称して。その身体は、まあ、羽川より胸は小さい（ふふん）けれど、スタイルは本当に凄い、女の子として完璧なものだった。特に腰のあたりのくびれなんて、犯罪的と言つても過言ではなかつただろう。

戦場ヶ原ひたぎ

あまりにも唐突な話だが、僕は今日初めて会話をした女の子の家にあがりこんでいた。綺麗な女の子。美人の類である。今日初めて会話をしたのだから、勿もち

# 002

僕と同じようにクラスで浮いていた——いや、彼女の場合は僕なんかとは違つて深窓の令嬢だなんて言われていて、浮いているというよりも近寄りがたいといった感じだったけれど、実は怖い女の子だと身をもつて知ったのは、ついさっきのことだつた。信じられるだろうか？ 他人の頬をホツチキスで綴じるという行為を。信じられるだろうか、優しさすらも敵対行為と見做すという言動を。

ついさつき、僕は頬をホツチキスで綴じられ、お

せつかいも敵対行為と見做された。

そんなことを平気でする女の子。

平気で全裸を見せる女の子。

重みの無い――

そうせざるを得なかつた――

傍げな女の子。

しかし、まるでその傍さを補うかのような、この僕でさえ舌を巻く毒舌と暴力。言葉の暴力も物理的な暴力も妹達を相手にして慣れていると思つていたのだけれど――そんな生易しいレベルではなかつたのである。

それはともかく。

戦場ヶ原は下着姿のまま、長い髪にドライヤーをかけている。その姿はとても綺麗で、羽川には申し分けないけれど思わず見蕩れてしまつていた。だって僕、健全な男子高校生だよ？ こんな完璧ボディのヌードを見せ付けられたら、誰だつてそうなるよね？ でも、胸はやっぱり羽川の方が大きい（ふつ

ふつふ）。

「なんだか不愉快な想像をされているような気がするけれど

「い、いや、そんなことないでふ！」

か、噛みました。うう、なんて鋭い女だ。

「……ま、いいわ。それよりも――阿良々木くん、

羽川さんとよく喋つてるわよね？」

気持ちはよさそうにドライヤーをかけながら、戦場ヶ原は当然のように尋問のような質問をする。

「あ、ああ。そうだな。まあ僕、一応副委員長だからな」

「そんなことを聞いてるわけじゃないわ

「え？」

「片恋相手なんでしょう？」

「いや、それは違う

「あらそう。てつきり」

「いや、一応、付き合つてるんだよ」

照れながら。

正直なところ、付き合つていることを言うべきかどうか少しだけ悩んでから答えた。なんとなくこの

ことは学校では秘密にしていたのだ。戦場ヶ原が片

恋相手なんでしょう？ なんていうくらいだから、やはりうまく秘密にできていたはずだつた。にもか

かわらず付き合つていることを教えてしまつたのは、

忍野がよく言うように、こういうのには信頼関係が

大事だから。決して惚氣のろけたかつたわけではない。決

してクラスメイトに話す相手がいなかつたためでは

ない。妹達なんかに言つたら、何を言われるかわか

らないしな。

戦場ヶ原は一瞬、驚いたような表情をした。そし

て、すぐにわざとらしい言い方で、

「ええっ！ どうやつて羽川さんの弱味を握つたの？」

——ま、この女なら、こうなるよな。さつきから

僕のことを毒舌でいじめている、この女なら……て

つきり、おしとやかな深窓の令嬢、だと思つてたのに

——騙された気分。詐欺に引っ掛かるつてこんな気

分なんだろうか？ 女つて怖い！

「なんでそうなるんだよ！」

「だつてあなたみたいな童貞が、あの羽川さんと釣

り合うわけなんでしょう？」

「童貞は関係ないだろう！」

「童貞じやないというの？」

「い、いや、それは」

「ええっ！ 阿良々木くんみたいな人が童貞じやな

いなんて——わかつたわ。羽川さんを手籠めにした

のね！」

「だからどうしてそんなに僕は乱暴な設定なんだ？」

まあ、かなり強引だつたのは否定できないけど。

でも、二人は愛しあつていた。

相思相愛だつた。

「何ニヤニヤしているのよ。気持ち悪い

「お、お前、そんな言い方はないだろう」

この女、どれだけ僕のことを馬鹿にしているのだ

ろう。確かに成績では僕はかなわない。この女、羽

川ほどじやないにしても、確かに頭がいい。学年で七位なんて成績を澄まし顔で取つたりするんだよな。

でも、だからってそんな言い方はないだろう。

「私を襲つたら許さないわよ」

「僕は羽川以外にそんなことしない！」

「——えつと、あの……簡単に引っ掛けかりすぎでしよう」

「…………」

「この変態！ やつぱり羽川さんを襲つたのね」

「だから！ 襲つたわけじゃないって」

「じゃあ、ラブラブなのかしら？」

興味津々の様子で綺麗な整つた顔を近付けてくる。僕はそれだけで簡単に動搖してしまう。だつて羽川も自分の彼女ながら相当な美人で可愛いけれど、この女とは全然違うタイプだし。なんか戦場ヶ原は大人っぽいし、クールだし——

「い、いや、そ、それは」

「——ふん、なに惚気ているのかしら」

「べ、別に惚気ちやいないよ」

「あらそう。残念ね——この、私としたことが」

「何がだよ」

「何でもないわ。何でも——」

「それから、しばらく戦場ヶ原は黙つてしまつた。

——そもそもである。

そもそも、何故下着姿の女の子の前に僕がいるのか。そもそも、何故彼女でもない女の子の全裸を僕は見てしまつたのか。ああ、羽川にばれたらどうしよう……なんて、ちょっと怯えながらも。いや、それはともかく、原因は『蟹』だつた。怪異である。僕の『鬼』の次は、蟹だつたのである。なぜ蟹が女の子を全裸にするのか。事の次第はややこしいし複雑な事情も絡んでいたので、今ここでは明らかにしないけれど。

しかし、細かいことは明らかにしないといつても、結果だけは話をしておくべきだろう。

——結果として戦場ヶ原は蟹から、怪異から解放

された。さほど大きなイベントもなく（精々僕が戦場ヶ原のメードを見たことくらい）、淡淡と。僕の場合と同じように全ての問題を解決できたわけではなかつたけれど、でも……それでも、僕はよかつたと思つてゐる。そして、僕は戦場ヶ原といい友達になつた。この結果の代償は羽川の機嫌（戦場ヶ原の裸を見てしまつたことがバレ、一週間くらい電話にも出でてくれなくて……泣いて土下座をして許してもらつた。ちなみに、これは比喩的な表現ではない。むしろ控え目な表現）と、戦場ヶ原からの毒舌。

それでも僕は、この儂げな少女——戦場ヶ原ひたぎと友達になれて本当によかつたと思つてゐる。

落ちてくる、前日までの話だ。

そう、あの毒舌ツンドラ女、僕の数少ない友達。クラスでは深窓の令嬢、あるいはクールビューティだなんて呼ばれている戦場ヶ原ひたぎとの出会いは、そんなドラマチックなものだつた。僕に彼女がいなければ恋に落ちていたかもしれないくらいに。

まあ、あの毒舌女は僕なんて相手にしてくれるとも思えないけどな。でも、話をしていると、結構いい奴だつたりするんだよ。まるで毒舌で照れ隠しをしているような感じ。

まあ、それはそれとして。

戦場ヶ原は学校の階段で足を滑らせ、僕の目の前に落ちてきたのだ。思わず僕はそれを受け止めて、彼女の秘密を知つてしまつた。重さが、無いという秘密を。正確には全く重さが無いというわけではなく、五キロとのことだつた。本来五十キロ（これを彼女の前で言うと四十キロ後半強と訂正される）あるはずの体重が——十分の一になつてしまつてゐた。

時系列を戻す。ゴールデンウイーク。戦場ヶ原が

# 003

重みを根こそぎ失っていたのだ。

その問題は忍野の助けで（あのおっさんは自分で助かつたなんて言うだろうけど）解決した……いや、今はゴールデンウイークの話だつた。

そう、ゴールデンウイーク。

僕と羽川はキスショットと対決する直前、体育倉庫でのあの約束通りに、一緒に勉強して、一緒に遊んで——休日になると必ずデートをして……愛しあうようになつっていた。つまり、このゴールデンウイークは毎日だつた。自分から求めていながら、高校生にはちょっと早いなんて僕は思つていたところもあつたし、羽川もてつきりそういうタイプだと思つていたのだけれど。

良くいえば、ラブラブ。

悪くいえば、依存。

僕達は、互いに依存していた。

愛欲に溺れていた。

僕は怪異になつてしまつたことにより。羽川はそ

の複雑な家庭の事情により。僕は彼女の肉体に埋めることで、彼女は僕に埋められることにより充足していた。救われていたのだ。

「暦……気持ちいい——くふつ、気持ちいいよお」

「翼つ！ 愛してる、くつ……翼つ！」

「お願い……すごく、いいの。もつとして」

翼が一番喜ぶ部分はおへそ側にあつた。だから僕はそこを重点的に可愛がる。僕の敏感な先端のくびれを撫でつけるたびに涙を浮かべながら僕に何かを訴えかけるような目で見つめてきて——大抵の場合は声にならない。このとき、おへその下側の柔らかなお腹を、そこから茂みのある盛り上がり、すなわち恥骨のあたりにかけてを優しく撫でながらすると、僕と翼は一番気持ちよくなる。物理的というよりも精神的なものだと思うけれど……優しいだけではなく、少し押すように強くしてもいい。

「くふつ……ふつ——くつ、はあつ、はあつ——

くふつ！ ……ふつ——くつ、はあつ、はあつ——

「曆い、そー……そこ……もつと、もつと  
翼つ！ ここ？ ここだよな？ 愛してる。愛し  
て、る……ずつとな、一緒だからな」

「うんつ、うんつ、うんつ！ ……はあつ、はあ」

「くつ！ ……くつ——くつ、くつ、んつ」

「——んんつ！」

……。

「はあつ、はあつ、はあ……」

「はあ、はあつ、はあつ」

「はあつ、はあつ、はあ……」

……。

……。

翼にのしかかつたままの僕は余韻が名残惜しかつ

たけれど、苦しげに息をしている彼女に負担をかけ

続けるわけにはいかない。熱い彼女のなかから引き抜

こうとすると、ぎりぎりまで彼女の皮膚と粘膜の境

目が、僕との別れを惜しむよう引っ張られて変形す

る——でも、彼女の「んんつ……」という声と同時

に、彼女のそれはぬるつと元の形に戻り、僕のそれは外気に触れ、急な温度差を感じる。

翼は僕が離れると、横向きになつて丸くなつてしまつた——まるでお腹の中の赤ちゃんのようだ。でも、彼女は息も絶え絶えといった感じで、ぐつたりといつた感じで。

「はあつ、はあつ、翼、大丈夫か？」

僕は彼女を撫でながら聞いた。

「はあつ……うん、ごめん……はあつ……ちょっと  
すごくて……」

そんな息の荒い翼を撫でながら、ふとベッドの隅を見ると几帳面に畳まれた服と下着が目に入る。そういうえば今日は可愛い系の私服だったな。「あまり私服持つてないんだけど、最近ちょっと増えてきちゃつた」なんて、恥ずかしげに言つていたことを僕は思い出していた。そんな可愛い彼女が、今は、こんなにも乱れて——服の畳み方ひとつ見てもわかるように、きつちりとした眞面目な委員長の中の委

員長である翼が……僕の前でだけ、こんなにも乱れてくれている。だからこそ、心の解放になるのだろうけど。

今日はラブホテルだった。国道沿いで、駅からちよつと離れたところにある、歩いて行ける距離のちよつと古びたホテル。高校生の予算的には割引時間帯でもあまり頻繁には行けないので、声を我慢しないでいいから全てを解放できるのと、やつぱり

ちよつと憧れていた部分があるから、僕も羽川もラブホテルはとても好きだった。やつぱり、その、え

つちな設備もあるし……。

翼も落ち着いてきたようだ。やつとのことで起き上がり僕に寄りかかるうとすると、僕が彼女から零れ出してしまう。

「あ、ごめん暦、ティッシュ取つて」「僕が拭くよ」

「ちよつと！ 恥ずかしい！ やだつ」  
さすがに恥ずかしかつたみたいだけれど、彼女が

抵抗できないのをいいことに、丁寧に拭ぬぐわせてもらつた。

「もおー、馬鹿つ……恥ずかしいんだからね——ちよつと、もー、あつ——んつ……そんなの——駄目だつてば……」

指で。

奥まで。

丁寧に。

ティッシュは僕の指を拭うために使つた。

……………。

翼がやつと起き上がる。僕が余計なことをしなければ、もつと早く起き上がれたかもしれない。そん

な彼女が僕の横に寄り添いながら耳元で言う。  
「暦、吸血鬼になつちやつたせいなのかな」

そういえば三度目から僕達は名前で呼び合うようになつていた。こんなことをするときだけは。

「ん、なにが？」

「吸血鬼の魅了。人間が虜にされちゃうの」

翼はナイトテーブルに置いていた眼鏡をかけながら、乱れた髪をそのままに言つた。

「んー」

僕はちょっと複雑な気分だった。でも僕を見る翼の目はとても綺麗で、上目使い（しかも、いつもより少し下にずらした眼鏡）で見つめられると、僕はもう思考を停止してしまう。こんな関係になつていいのに。いや、こんな関係になつたからか。

「魅入<sup>みい</sup>られるつていうのかな。私、もう——」

むしろ——僕が魅入<sup>みい</sup>られているような気がするんだけど。

「翼——」

「あ、ごめんごめん。そんな顔しないで。暦のこと、ちゃんと好きだよ？ 愛してるよ？ でもね、やつぱりちょっとね。怖いのよ」

「僕が——吸血鬼だから？」

「違う違う！ もう、そんなこと思うわけないでしょ！ やめてよ——ええとね、魅入<sup>みい</sup>られちゃつた私

が怖いの。自分自身がね」

「そつか……僕にはわからないけど」

「なんか、すごく嫉妬深くなつた」

「ああ、こないだクラスの女の子と話してたら、しばらく機嫌悪かつたもんなあ」

「ごめんね」

「んー、でも僕は嬉しかつたけどなあ」

「なにそれ、変態っぽい」

翼はふざけてちょっと引いたような表情をする。「ご存知ではありませんでしたか？」

変態紳士として振る舞う僕。

「嫌になるくらい知つてますけど」

委員長の中の委員長は、眼鏡を直しながら、わざと委員長っぽく言つた。

「嫌だつた？」

「んーん。んつ」

甘えながら蕩けるような深いキスをしてくる。僕の口の中が全部、翼の味になるくらいの。

「はあつ——それに、私、ええと、えつちになつた

と思わない?」

「あ、それはわかる」

「馬鹿! でも、そういうことなんだよね——」

「でも、それは僕も一緒だよ。翼の前ではこんなに

甘えてるし」

「ほんと、おっぱい好きなんだから——でも、そつ

か。そうだよね」

「そういう意味では、まあ、お前もキャラ変わった

かな」

「キャラなんて変わつてない。暦の前でだけ」

「ふふ」

「うふふ……んつ、ちよつと暦……また?」

「嫌?」

「んーん。もつとしたい」

「すつごい、ぬるぬるしてるとよ」

「んふふ——つあんつ」

「なあ」

「ん?」

「ええとさ」

「なあに?」

「その——後ろから、していい?」

「もおー、恥ずかしいんだよ?」

「かしそうにお尻をこちらに向けてくれる。  
「う、ごめん」

「もう……その、えつと——」

「ん?」

「いっぴい——気持ちよくしてね」

互いに魅入られた僕達はゴールデンウイークの間、  
ずっと、延々と、こんなことばかりをしていた。

## 004

で飛ばすっていうのもいいもんだ。でも、あまりにも早く着きすぎた僕は、とりあえず羽川の家の近くにある大きな公園で時間を潰すこととした。張り切りすぎて疲れたのもあつたし。

午前九時を過ぎていた。

母の日。

僕はこんな日は家に居づらいし、羽川も僕以上に

面倒な環境だつた。それでも、羽川は僕と出会つた

頃に比べて、随分と家族との関係が楽になつたとの

ことだつた。心を解放できる機会を得たことにより

——それは僕も同じだつたから、よくわかる。

羽川との約束の時間は午前十時だつたけれど、色

々とあつて僕は家を早めに出てしまつた。まあ、母

の日について妹に色々と責められて、逃げるようにな

ってきたからなんだけど。

まあでも。

休みの午前中に、お気に入りのマウンテンバイク

——それにしても、この公園……誰もいないな。さつき小学生くらいの大きなりュックを持つた女の子が居たけれど、すぐにいなくなつちゃつたしな。道にでも迷つていたのか、公園の入口のあたりにある、この周辺の地図を見ていたようだけど。

まあ、誰もいない公園でも、やつぱり休みの日はいいな。特に羽川とこんな関係になつてからは別に学校が嫌というわけじやないけれど、平日は羽川と一日中一緒にいられないから。

ああ、休日最高。

もうずっと休日になればいいのに。

「あらあら、公園に汚物を捨ててはいけないわね。

なんなかしら、この産業廃棄物は。あら、ごめんなさい。よく見たら、これはこれは。えつと、誰だ

つけ？」

ここまで酷いクラスメイトへの話し掛け方つて、これまでの人類の歴史上、存在したのだろうか。

「えーとな、どこから突つ込んだらいいか悩むんだけど、まずは名前からだ。僕は阿良々木だ」

「ああ、そうそう。知っていたわよ。えーと、そう。阿良々木くんじやないの。影が薄いから忘れたりなんをしていないわよ」

僕はなんでここまでいじられなきやならないのだろう？ どちらかといふと、この女からは感謝されてもいいくらいだと思うのだけれど。

「あら、ごめんなさい。冗談よ？」

「ああ、いいよ。なんかお前の毒舌は、もう慣れだし、慣れなきやいけないような気がしてるんだ」

「あらそう。それはつまらないわね」

「ええと、僕はどうリアクションすればいいんだ？」

「まあいいわ。リアクションに関しては期待してないから」

「そうすか。まあ、座つたらどう？」

「じゃ、隣、お邪魔するわね。女の子に優しいのね。さすが彼女持ちつてところかしら」

まつたくどんだけ偉いんだ、この女は。可愛い格好しているのに。こないだの私服とは随分と違うじゃないか。大体、胸、強調しすぎじやないか？ 露出は多くないけれど。僕は大好きだ。こんな格好。思わず脳内で羽川の胸と比べてしまう。

「大体、折角女の子が可愛い格好をしているのに褒めることもできないような男に、リアクションなんて期待する方が間違っているわよね」

……この女、僕の脳内を読めるのか？ ていうか自分で自分を可愛いって！ 今日も戦場ヶ原さん、絶好調だな。

「あ、そういうえば戦場ヶ原、こないだとは随分違う感じだよな」

「なにその言われたから仕方無く感満々の台詞。まあいいわ、阿良々木くんじやあ、そんなものよね」

「そりや申し分けありませんでした。でも、本当、可愛いと思うよ」

「なんだろう、こいつには割と、こんな台詞を言えたりするんだよな。」

「ふん、見蕩れてくれたかしら？」

「まんざらでもない様子の戦場ヶ原。よかつた。これでキレられたら、さすがの僕もヘコむからな。いい調子だ。」

「ああ、正直、ちょっとな。見蕩れたよ」

「あらそう。嬉しいわ。羽川さんに報告しておくわね」

「お前！冗談でも止めろよな！」

「本当、洒落にならないんだよ！ 羽川は！ 女の子のことに関しては本当に怖いんだからな！」

「ふふ、どうしようかしら」

「もう嬉しくて仕方がない様子の戦場ヶ原。この女、僕をいじめることが生き甲斐なんだな、きっと。」

「つうか、なんでお前、こんなところにいるんだよ。こんな時間に」

「まあ、散歩といったところかしら。このあたりは私の繩張りだつたのよ」

「過去形なのは、戦場ヶ原は今、このあたりに住んでいないから。僕はこないだ彼女の家にお邪魔したから知っている。何故なぜ、今、このあたりに住んでいないのかも。怪異がらみの話だつたから、戦場ヶ原から教えてもらつたのだ。いや、正確には怪異に遭遇する元凶となる話というべきか。」

「ああ、そつか、そういうえば羽川と同じ中学だつたよな」

「ええ、そうよ。ていうか阿良々木くんこそ、こんなところで何をしているの？」

「羽川の家に行く予定なんだけどな、早く着いちゃつてさ」

「ふうん、相変わらずラブラブなのね」

「まあ、うまくいってるかな」

「また惚氣ちやつて」

「べ、別に惚氣ちやいないよ」

「そ、ういえば、こないだの、お礼。していなかつたわよね」

戦場ヶ原は立ち上がり、話題を変えた。こうい

うところ、強引なんだよなあ。

「ん、こないだ？ ああ、いいよ、そういうのは」

「あらそ、う。それはつまらないわね」

「どうせお前、お礼といつてもお礼参りよ。とかい

つて、また僕をいじめたりするんだろ？」

「あら。それは面白そ、うね。まあ、折角だからそれは今度にしておくわ」

「うう、余計なこと言わなきやよかつた……。

「本当、お礼はしたいと思つて、いるのよ。そうね、何か私にして欲しいことなんてあるかしら？ ある

程度なら言つことを聞いてあげるわ。言つておくれど、エロ方面は駄目よ。彼女いるんだから」

「お前な——」

僕は、あの地獄のよ、うな日々を思い出しながら本当にうんざりした表情を隠さずに言つた。

「お前が不用意に、裸を見られた件を羽川に漏らしてしまって——僕がどれだけ怒られたのかわかつてんのか？」

「意外よね。羽川さんがあそこまでするなんて。恋は盲目ということなのかしらね」

「なんか綺麗な台詞で誤魔化<sup>ごまか</sup>そうとしようとしてる

けど、そんなんじやなかつたからな！ 土下座したんだよ。マジ<sup>ごまか</sup>土下座だぜ。しかも本気で泣きながら

だよ？ お前——あいつ、そのときなんて言つたと思<sup>う</sup>？ すごく冷たく——綺麗な土下座ね……。だ

よ。本気で怖かつたよ！ 殺されるかと思つたよ！

お前……あれ、全盛期の忍より怖かつたかもしけな

いぞ

「なんだか——惚氣られてるようになしか聞こえないけれど」

「どうやつたらそんな解釈になるんだよ！」

「ま、過ぎたことはあまり気にしないことね」

「……お前のせいなんだけどな」

「でも、い・い・も・の。見せてあげたでしよう？」  
 「いいものって！ てか、そんなに色っぽく言わないでくれ！」

「だつて私がいじめないと、あなた、つまらないでしよう？」

まつたく、この女は――

「ま、まあ、そりやあな」  
 「はあ――そんなだから彼女に怒られるのよ？」

「…………」

僕がため息をついて苦笑していると、小学生くら  
 いの女の子が視界に入ってきた。

さつき地図を見ていた、リュックの女の子だ。

「なんかもう、完全に弄<sup>もてあそ</sup>ばれてるな。  
 「あーあ。阿良々木くんは、大人なのよね」

「ん、どうしたんだよ」

「やりまくりなのよね」

「お、お前、そんな言い方――」

「童貞野郎だと思つてたのに」

「もう勘弁してください！」

「で、お礼なんだけど」

「あ。そうだ。羽川に余計なことを言わないのでくれ

ればそれでいいかな」

「ああ、そうか。僕の視力だから見えたのか。いつも忘れてしまう自分の身体能力。まあ能力つつても微妙だからなあ。春休み、吸血鬼だった頃の能力なら忘れるようなことはありえないのだけど。

「あらそう。じゃ、一回だけ言わないのであげる」  
 「一回だけかよ！」

そして色々といじめられながら、からかわれながら、戦場ヶ原から読み方を教えてもらつた。

『はちくじまよい』

なんかすごい名前だな。まあ、僕も戦場ヶ原も人のことは言えないか。

「なんかさ、あの子、さつきから迷子になつてるっぽいんだよな」

「えつ？」

うーん、僕が行くしかないだろうな。女の子相手は女の子の方がいいんだけど、戦場ヶ原は面倒ごと嫌いそうだしなあ。

「ごめん、ちょっと僕行つてくるよ」

「あら、そう……」

なんだろう。そんなにテンションが下がるくらいに嫌なのかな？ 戦場ヶ原つて子供嫌いじやないんだけどなあ。うーん。

「どうしたー？」

道にでも迷つたか？」

大きなリュックを背負つたツインテイルの女の子。

急に話しかけられて驚いたように僕のことを見ている。

「十五話、本当に放映されるんですかね？」

「いや、待て八九寺。お前、話の流れ無視してんじやねえよ」

「うるさいですよ。阿良々木さん。私は今Pとして、十五話のことで頭が一杯なんです」

「つうか囁めよ。つうかどうすんだよ、このSS」「大丈夫ですよ、こんな無駄なSSなんて、誰もここまで読んでないですから」

「無駄とか言うなや！」

「まあ、それにしてもですよ」

「なんだよ」

「随分と好き勝手やつてますねえ。この話、絶対アーメにできないですよね」

「まあ、SSだしな。つか戦場ヶ原も待つてるんだからさ、ちょっとは協力してくれよ」

「ええと、一応設定としてはですね……」

「設定とか言うなや！」

「設定としては私は既に浮遊霊なので、戦場ヶ原さ

んにも見えています」

「もうまよいマイマイでもなんでもねえ！」

いい話なのになあ。僕、一番好きなストーリーなのに。

「なら僕も出てもかまわんna」

僕の影から忍が出てくる。

「設定では、既にあるじ様と和解したことになつておる。ちよくちよく、あの委員長にちよつかいでも出すような設定にでもするかの？ カカツ」

「やめてくれつ！」

ああ、酷いことになつてきちゃつた。

「まあ、ちよつと長くなりすぎますからね。このあたりで締めておきます」

「はあ、そうすか……」

「そうじやの。まあ、この場はミスドで手を打とうかの」

「わかつたよ、忍。別にそんなこと言わなくとも、

いつもみたいにデートの途中でミスド寄るからさ」

「カカツ、ならばよいよい  
「いやあ、わたしはお邪魔でしうから、このあたりで退場します」

「いいですいいです。人の恋路を邪魔する奴は熊に

蹴られて死んでしまいますからね」

「それは即死っぽいな。まあ、馬でも死ぬだろうけど」「ああっ！ しまりました！」

「ん、どうした？ 八九寺」

「せつかくうまいこと言つたと思つたのに、私、既に死んでました！」

「お、お前！ それは、そういうネタは悲しすぎるだろう！」

「じゃ、そんなわけで。わたしはこのあたりうろうろしているので、見かけたら話しかけてください！ ていうか傾物語次第ですけどー」

八九寺は元気よく走り去つてしまつた。色々なことをぐちやぐちやにして。メタにも程がある。

「じゃ、そんなわけでの。儂もとりあえず影に戻るかの。それにしても傾物語は……儂に関係するのかのう……」

戦場ヶ原の方を向き、手を振つてから影に戻る忍。やたらと仲いいんだよな、こいつら。馴れ合いなんてせぬぞ。なんてこといつてた癖に。

…………。

まあ、いいか。

えーと。

僕は戦場ヶ原のいるベンチへと戻つた。

「阿良々木くん、彼女いるのにロリコンなの？」忍ちゃんなんて、知らない人が見たら犯罪よ？ まあ、

あの八九寺ちゃんも、かなりヤバそうだけれど「違うつ！ まあ、いつものおせつかいだよ」

「ふうん。やつぱり

「ん、何がやつぱりなんだ？」

「なんでもないわよ。いえ、なんでもなくないわね」

「なんだよ、思わせぶりじやん？」

「やつぱりおせつかいなんだな。つて

「はは、そうかもな」

「阿良々木くん、私のことも助けてくれたじやない？」

「まあ、僕は何もしてないけどな」

「あのときね。ちょっとキュンと来ちゃったのよ。

私、昔から惚れっぽいのよね」

「……そ、そつか」

「でも、もう彼女居るし。残念ね。居なければアタックしていたのに」

戦場ヶ原は笑いながら、なんでもないことのよう

に、自然に言つた。こいつ、普段無表情なのに、こんな笑い方することあるんだなあ。

「……お前みたいな美人から、そんなこと言われるのは本当、光榮だよ。マジで、お世辞とかじやなくてさ」

「んふふ、ありがと。まあ、阿良々木くんは見てるだけで面白いから、お友達として付き合わせてもら

うわ」

「それだけでも光榮だよ。お前つてさ、結構——あ、羽川から電話だ。ああ！ 時間過ぎちゃってる。ごめん、行かなきや！」

「あら残念。じゃあね。羽川さん、可愛がつてあげるのよ」

戦場ヶ原は走り出そうとする僕に手を振ってくれた。その姿は年上のお姉さんみたいに思えて、ちよつとドキつとしてしまう。

僕は羽川からの電話に謝りながら手を振った。急いでお気に入りのマウンテンバイクに向かつて駆け出しながら。